

大学生のサマータイムに対する考え

先に平沼洋司会員は、「日本の気候から見たサマータイム考」で、サマータイムに係わる気候的な特徴を指摘しました(平沼, 2001)。気象の専門家であり行政職にある方の意見は、大変説得力のあるものであり、興味深く読ませていただきました。ところで、筆者はかつて大学の定期試験で、世界の気候をある程度講義した段階で、サマータイムに対する学生の意見を求めたことがあります。その結果をまとめ、紹介します。

筆者は明治学院大学で教職科目の自然地理学を担当しています。白金校舎で一部・二部あわせて2コマ、横浜校舎で1コマの授業で、3コマあわせて受講生は150~250名ほどです(教職に関係なく卒業に必要な単位として認められている学部があるため)。現在では気候の表現法、世界の気温・降水量・気圧及び風の分布や、(ここからは年によって多少異なるのですが)日本の気候(衛星画像の見方を含む)、「気候システム」の考え方の紹介、それによって説明される異常気象や気候変動などを講義しています。昨年度までは通年講義で、持ち込み可で前後期2回の試験を行い、出席点を加味して得点を算出していました。試験問題のうち1題は、「根拠をあげ、何でも自分の意見を述べられる問題」とし、あらかじめ予告します。

1999年度の前期の授業では、世界の気温・気圧及び風までを講義し、試験問題のうちの1題として「世界の気温について勉強したことをふまえて、導入が検討されている『サマータイム』について自分の見解を述べて下さい。」を出題しました。答案のすべてをコピーし、もとの答案は受講生に返却しました。その結果は以下のとおりです。主な理由も、気温に関係ある・ないにかかわらず、あわせて紹介します。

●賛成…22人

その理由(主なもの):

- ・いつまでも明るいことで心にゆとりが生まれる。
- ・蒸し暑い季節は生活のリズムを変えるのもよい。
- ・夏合宿だと思えば苦にならない。

- ・朝から蒸し暑いのでからいっそ働いた方が楽だ。
- ・日本と気候が似ているアメリカ合衆国東部や、日本より低緯度のエジプト、日本より高温多湿のブラジルでも実施されている。
- ・エネルギー消費の抑制になる(ただしこのような理由をあげた受講生の中には「日本の風土には適さないが」と言及した人もいました)。

●どちらとも言えない…16人

その理由(主なもの):

- ・国際協調をしながらも日本は独自の道を模索すべき。
- ・日本全体ではサマータイム導入に適した地域とそうでない地域がある(これは反対の理由にもなっています)。
- ・学校や企業内でまず導入してみたらどうか。
- ・気候的側面からはメリットがあるとは思えないが、省エネ、余暇の拡大(他方、「労働時間の増大で生産量を上げられる」という意見もありました)という点では効果がある。
- ・人間は太陽の下で活動するようにできており、導入にはそれなりの意味があるが、現在享受している楽しみを失うことにもなってしまう。
- ・子供は遊ぶ時間が増えうれしいが、高齢者は体のリズムが狂わされづらい。

●反対…159人

その理由(主なもの):

- ・日本にはあわないとしてすでに一度廃止されている。
- ・韓国や中国でも中止、中断されている。
- ・勤勉な日本人は残業時間を増やしてしまう。
- ・ヨーロッパより日没が早く、夕方の余暇を屋外活動に活用できない。
- ・1時間早くエアコンを使うことになり、省エネにはならない。
- ・体内時計が狂う。留学中経験して苦痛だった。
- ・(1限受講生)これ以上早起きしたくない。
- ・システム変更の経費がかかりすぎる。この不況にそ

んな金があるのか？

- ・先進国が実施しているなら無条件に導入するのか？
- ・朝から気温や湿度がすでに高く、「快適な朝の1時間の利用」は有り得ない。
- ・ヨーロッパ諸国と異なり、日本列島は南北に長く、一律に導入するのは無理である。
- ・日本では夏と冬で日照時間や太陽高度がヨーロッパほど違わない。
- ・夏の朝が涼しく乾燥した地域でこそ意味のある制度で、高温多湿の日本の夏にはそぐわない。

これをもって、そのまま「サマータイムに反対する意見が圧倒的多数」と言うのには若干問題があります。すなわち、「夏時間反対」のタイトルを冠した朝日新聞夕刊のコラム(1999年5月11日付の「窓」—ここには朝倉 正会員によるサマータイム反対の意見を紹介しています—)をプリントに加えた一方で、『環境白書』などサマータイムに肯定的な(政府刊行物だから当然ですが)記事(たとえば環境庁編, 1999)を紹介していないこと、また、後述のように、筆者がサマータイム導入に反対の立場を明言したこと、さらに、試験答案としては恐らく反対の方が書きやすかったことがあるために、反対とした受講生が多かった可能性も否定できません。「世界の気温の分布をふまえた上で」の前提が十分意識されていたのか、あるいは世界の気温分布を正しく講義できていたかについても疑問がない訳ではありません。しかし、同じ授業を選択した大学生の意向としては意味のある結果だったと思います。導入に反対する受講生の多くが、平沼(2001)で触れたような日本の気候の特徴やサマータイムに否定的な見解と同じようなことを指摘しており、それなりにサマータイムの意味や世界と比較した日本の気候の特徴を理解していたと思われるからです。

大学の試験・レポートには、覚えてもしくは調べて理解したことで評価されるものと、これを前提として自分の考えをまとめ、明瞭簡潔に表現することで評価されるものがあると思います。この設問はむしろ後者に分類されるものですが、今後もこのような問題を出してみようと考えています。ただ、気象教育研究会(2001)で報告されているように、新学習指導要領の下

で「日本の天気」を理科で学習していない学生が今後入学してくることで、このような出題が困難になる可能性があります。しかし、これは、中学校社会科で「日本の気候」や高等学校地理B(正確な数字はわかりませんが、地学より履修者は多いでしょう)で「世界の気候」を引き続き学習する(文部省, 1998, p.18; 文部省, 1999, p.42)ことを考えれば、楽観的に思われるかもしれませんが、筆者はあまり心配はしていません。

本来もっと早くこの原稿を執筆するつもりでしたが、ちょうど平沼(2001)を目にした時に、手術のため約3週間入院する羽目になってしまい、そのため執筆が遅れてしまいました。以前にも約6週間・約3週間の入院を経験しているので、検温のため6時には起こされることに慣れてしまったのか、通常は目覚まし時計無しでも6時には目が覚めてしまいます。よって1時間目の授業は大好きなのですが、逆に「冬は1時間遅く起きてよい」と言われても困難なのです。日本の気候には適さないと考える以上に、時計を進める(遅らせる)ことによるデメリットは、健康面を始め相当なものかと筆者は考えています。

末筆ながら、答案を作成してもらった当時の受講生の皆さんに感謝します。「何かの形で公表するかもしれない」と当時お断りしておきましたが、このような形で利用させていただきました。

(明治学院大学(兼任)・
湘南国際女子短期大学 仁科淳司)

参考文献

- 平沼洋司, 2001: 日本の気候から見たサマータイム考, 天気, 48, 507-511.
環境庁編, 1999: サマータイム(夏時間)制度の導入, 平成11年版環境白書, 大蔵省印刷局, 267-270.
気象教育研究連絡会, 2001: 「学校教育における気象学の現状と新学習指導要領」報告, 天気, 48, 599-604.
文部省, 1998: 中学校学習指導要領, 大蔵省印刷局, 104 pp.
文部省, 1999: 高等学校学習指導要領, 大蔵省印刷局, 388pp.